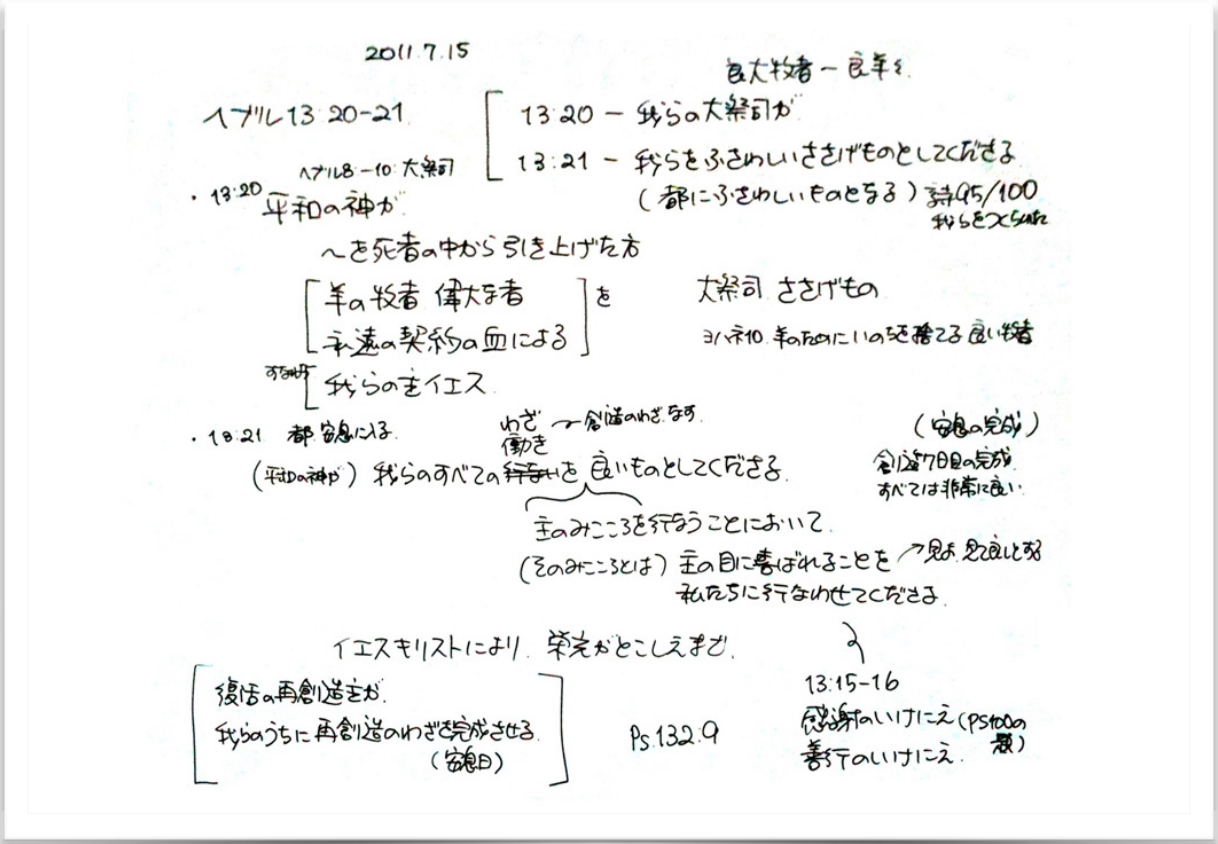
ヘブル人への手紙13:20-21



ヘブル人への手紙13章20節から「(20)永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導きだされた平和の神が、(21)イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行い、あなたがたがみこころを行うことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全なものとしてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。(アーメン。)」という箇所がありますけれど、羊の大牧者、牧者について研究しているところで、この箇所を見なければならないと。

ただ、グルグル回っている言い方で混乱して、何を言っているのだろうと、暗記はしたもののよくわかりませんでした。それで、もう一度確かめてみようということで、いろいろな他の訳を見たりしたのですけれど…。

大きくは平和の神様が何かをしてくれるということは、わかりましたけれど、苦労しましたね。ギリシャ語の直訳を使って、ことばの順番を比べたりして確かめてみました。最終的には、ヘブル人への手紙の全体の内容をまとめるような形で言われている宣言の賛美であろうということは、前提として分析をしてきました。

大きく2つに分かれています。20節と21節。20節のほうは、平和の神様が…と。その平和の神様の説明をしています。21節のほうは、その平和の神様は私たちのわざを良いものとしてくださるということが言われています。

平和の神様はどういう神様かというと、誰かを死者の中から引き上げた方。それは、誰なのかというと羊の牧者、偉大な者。その羊の牧者は、永遠の契約の血による牧者である。すなわち我らの主イエス・キリスト。

その我らの主イエスを死者の中から引き上げた神様は、私たちのわざを良いものとしてくださるということなのですけれども、ヘブルの手紙の中では、「大祭司である主イエス・キリスト」と、「私たちは安息に入る、都に入る、新しい天に導き入れられる」というこの2つのことが繰り返し言われていたわけです。我らの大牧者は、良い牧者で、私たちをふさわしい捧げものとしてくださる。私たちを神様の羊にしてくださる。受け入れられる羊にしてくださるということが全体の内容になります。

大祭司は羊のために命を捨てる良い牧者であるということは、ヨハネなどに言われていますし、8章から10章までは、ずっとそのことを話しています。(13章)後半の21節からは、私たちのわざが良いものになる。それは、みこころにかなうものとなる。みこころを行うことにおいて、良いものとなる。そのみこころというのは、主の目に喜ばれることを行うことだということなのですけれど、このアーメンの箇所の前の段落のところ15節から16節に、感謝のいけにえをささげよう。良い行いを神様はいけにえとして喜ばれるというようなことが書かれていますけれど、ヘブル人の手紙の中では、「〜しようではないか！」という言い方が何度も繰り返されています。

それらのことを見ると、20節から21節のところで何を言っているのだろうと考えると、後半のところを見ると特に、創造の7日目のことを思い出すでしょうと。安息についてずっと言っていますからね。都に入る、安息に入るのは残っているのですからということをヘブルで言われていますので、安息日の完成、7日目の完成です。神様は見て、それを良しとされた。そして、すべては非常に良かったという7日目のことを主の目に喜ばれることとか、すべてのわざ、すべての成したことが、トブとされる、良いものとされるということを見ても、そのことのつながりが言われていることがわかると思います。

ヘブルの最初のところから、詩篇95篇が出てきます。引用されたりする。その詩篇95篇も、95篇に並行する100篇も、我々は造られたものだ、神様の羊たちが造られたものの最高のものとして書かれていますので、この2行のアーメンというところは、復活の再創造主が、私たちのうちに再創造のわざを完成させて、新しい都に入れてくださるというのが、「永遠の契約の血による羊の大牧者」というところから始まっている平和の神様を賛美するいけにえの内容だと思われます。